沖縄作戦経過要圖

1/6万
0 1K 2K
大嶺岬
瀬長島
当間
糸満
金城
守軍部隊
0930 7 轉進予定
轉進
高地
平良
真壁
喜屋武村
喜屋武崎
荒崎
24D
62D
44DS
退却攻撃
西原村
高地
宮城
赤嶺
真栄平
真栄里
真栄原
真栄村
仲座
知念
大城
新城
M8D

第一款　遊擊戰轉移迄の狀況

一、一般の狀況

四月一日嘉手納海岸に上陸せる米海兵第三軍團は一部を以て北、中飛行場地區に在りし特設第一聯隊を攻撃すると共に主力を以て陸路名護方面に北上東に北に策應するかの如く其の一部は四月七日名護灣に上陸し四月九日頃には本部半島に在る國頭支隊主力は完全に包圍せらるゝに至れり

二、第四遊撃隊の狀況

敵の嘉手納海岸に上陸するや直ちに中頭地區に對する遊撃戰を企圖し四月一日夜恩納岳より石川岳に前進す偶々同高地に潰走し來たれる特設第一聯隊及海軍部隊と共に（總員約二千）敵の攻撃を受け目的を達せず四月六日恩納岳に後退し之を死守す

三、第三遊撃隊の狀況

タニヨ岳を根據とし四月七日頃より漸次其の周邊地區に對し遊擊戰を開始す

四、國頭支隊主力の狀況

名護方面に上陸せる敵は四月九日二〇〇〇頃安和、伊豆味、乙羽岳の線に進出す十三日頃より激烈なる砲爆と相俟ちて敵地上部隊の攻擊本格化し十四日八重岳周邊の支隊主力は完全に包圍せらる敵の攻擊は二七〇高地方面に於て特に猛烈にして先づ該方面より陣地を突破進入せらるゝ茲に於て支隊長は十五日夜現陣地を放棄し伊豆味附近を經てタニヨ岳に轉進し遊擊戰に轉移ずるに決す支隊主力は十八日頃より逐次タニヨ岳に到着し二十日頃には約四千の兵力を集結二十三日一應の防禦配備を完了せり

敵は二十三日タニヨ岳包圍の態勢を完成二十四日集中砲爆擊を加へつゝ羽根地、名護正面より攻擊し來たる此の夜支隊主力は國頭北部地區に分散轉進し二十五日タニヨ岳は敵の占領することゝなる

五、伊江島守備隊の狀況

敵は十五日夜伊江島西海岸に上陸同方面守備を擔任しありし田村大尉の指揮する飛行場設定部隊を壓迫して一擧に島の中部八二高地の線に進出東に十六日夜伊江島東南岸に上陸し城山を心とする守備隊主力（第二歩兵隊第一大隊）の陣地に對し西方及南方より猛攻を加ふ同守備隊は寡兵寛く善戰敢闘せしも十九日夜守備隊長佐藤少佐逆襲の爲城山麓を前進中戰死し部隊の戰力又此の頃迄に概ね衰き二十日伊江島は完全に敵手に入れり

（註）

イ、軍司令部と國頭支隊との通信連絡は四月十五日一名護東方地區に轉進し遊擊戰に轉移するまでの無電報告を最后として杜絶し爾後同支隊主力は勿論各遊擊隊、伊江島守備隊の狀況は軍司令部にては全然不明なりき

前述諸狀況は五月上旬第三遊擊隊長の派遣せし連絡者並に之に端

緒を得て軍より、派遣せし蒲田少尉以下の挺進連絡班に依り判明せるもいなり

軍は作戦開始前に於ては敵は同時其の優越せる戦力を恃み一挙に大航空根據地たる伊江島に上陸する算大なりと判断し本部半島の支隊主力陣地内には獨立重砲兵第百大隊の一小隊（十五加二一）及海軍十加二門を配置し之に依り敵の伊江島上陸敢に爾後に於ける同飛行場の使用を妨害する計畫なりしも敵が慎重に先づ本部半島に上陸せし為是等長射程砲は其の威力を發揮するに由なかりき

第三款　遊撃戦轉移後の狀況

石川岳に後退國頭支隊長の指揮下に入れる特設第一聯隊（實際に於ては聯隊は連隊連絡兵の他の關係上國頭支隊長の掌握下に入りあらず）は第四遊撃隊と相協同し石川岳、急納岳の間を往來して遊撃戦を續行し終戦に至るその間聯隊長青柳中佐七月戦死す

四月二十四日夜タコヨ岳を撤し國頭北部地區に分散退避せる國頭支隊主力は爾後殿れ統制なく行動し遊撃戦の效果見るべきものなし

第四遊撃隊は四月六日石川岳より急納岳に後退四月十二日より五月一日の間敵の攻撃を受けたるも克くこれを保持して遊撃戦を續行しありしが五月二十一日より再び敵の攻撃を受け六月六日八志岳に後退す爾後依然小規模遊撃戦を續行して終戦に至る

第三遊撃隊は敵撤退後再びタコヨ岳に帰り其の周邊地區に潜し小規模の遊撃戦を相々に續行し敵宿營地の襲撃交通妨害に任じ相當の效果を收めたり敵講兵第三聯隊の主力は國頭地區の掃蕩概成するや四月下旬より逐次島尻方面に南下して主力の戦闘に參加し爾後は殆ど殘存部隊に對し單に警戒的指揮に止めたるものゝ如し

第三節　慶良間方面の戦闘（要圖第八參照）

慶良間群島に展開せし海上挺進第一戦隊は第十一船舶團長大町大佐の同方面巡視中三月二十六日米軍の攻撃するところとなれり

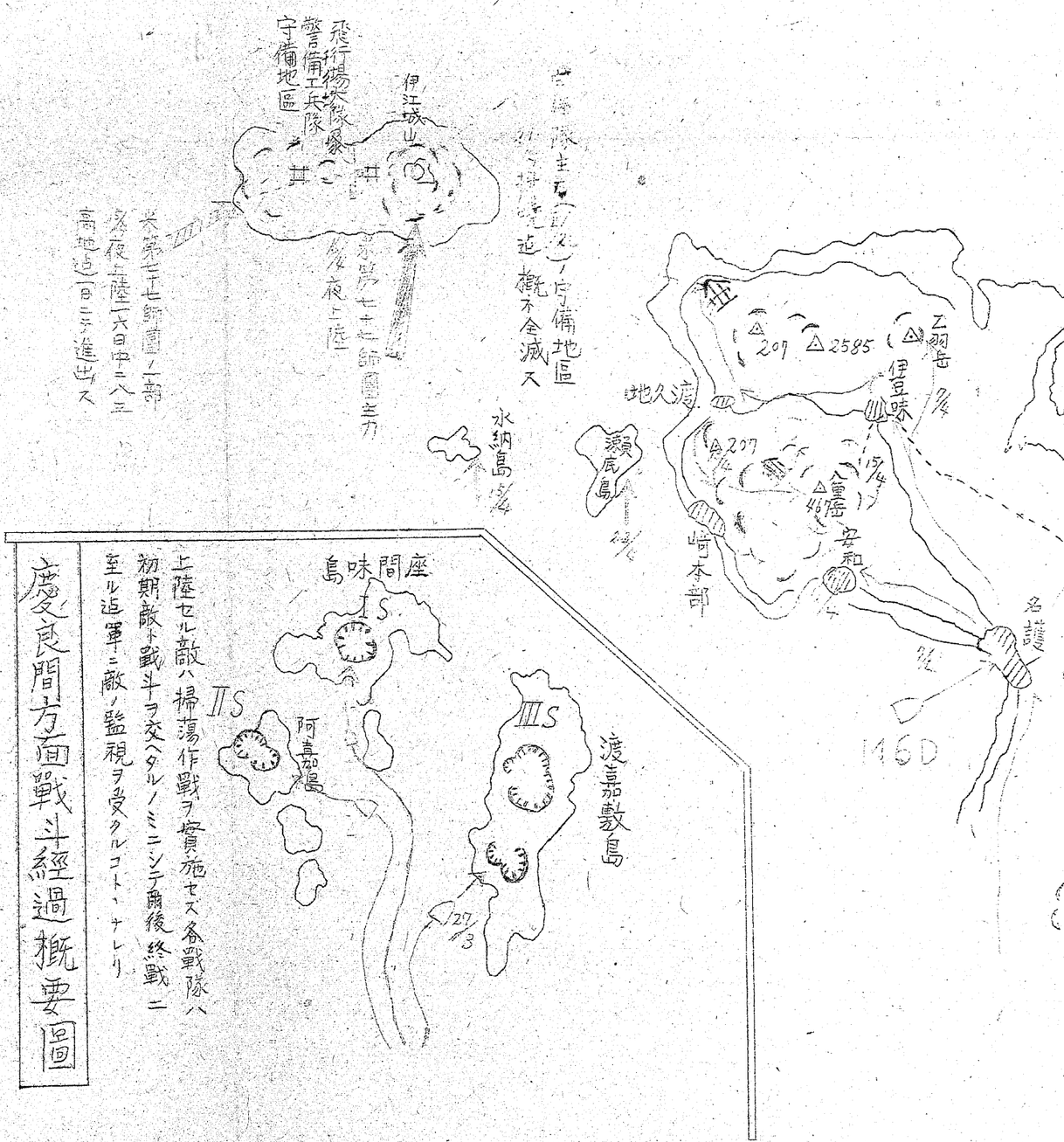
在慶間味島第一戦隊、及在阿嘉島第三戦隊は三月二十六日、座渡嘉敷

島第二戦隊は翌二十七日夫々稍力なる艦隊兵部隊の為に慶良間諸島より上陸攻撃せらる諸隊は之を海上に邀撃するの暇なく又船舶團長の率ひて沖縄本島に輸送せんとせし企圖（獨斷）も空しく水泡に帰し看護隊は夫々山上に壓迫せられ遂塞して終戦に及ぶの止むを得ざるに至れり軍司令部と石部隊との通信連絡は三月二十七日以後杜絶し爾後皆として狀況明かならず玉碎と推定せられおりしが五月上旬一部人員の脱出に依り狀況判明せり爾後福地少尉に通信機關を附して渡嘉敷島に派遣するに及び連絡回復し両方面の狀況は漸ね軍司令部の承知するところとなれり

頭支隊戰斗經過概要圖

要圖第八
備考
二八重岳附近國頭支隊主力八四月十五日
夜伊豆味ヲ經テ「タニヨ」岳ニ後退ス
二八名護岳陣地ハ先ヅ一〇七高地
方面ヨリ山腹壊セリ
今帰仁
我地島
伊豆味
仲尾次
名護
名護岳
2152
△3452
久志岳
△3352
△2585
△207
八重岳
安和
崎本部
瀬底島
水納島
地久泊
渡嘉敷島
M6D
IIIS

國頭支隊戰斗經過概



慶良間方面戰斗經過概要圖

上陸セル敵ハ掃蕩作戰ヲ實施セズ各戰隊ハ初期敵ト戰斗ヲ交ヘタルノミニシテ爾後終戰ニ至ル迄軍ニ敵ノ監視ヲ受クルコトヽナレリ

第四節　海上戰鬪

第一款　海上挺進隊の運用

軍は既述の如く海上挺進第一乃至第三戰隊を慶良間群島に、海上挺進第二十六乃至第二十九戰隊を沖繩本島南部に配置し敵上陸の初動隨時隨處に其の主力を機動集中して敵輸送船團を攻撃一擧に決勝的效果を求むるを當初の一般の方針とせるも敵上陸直前に於ては軍首腦部の意向持久消耗戰主義に傾きありたるところ偶々作戰勞頭在慶良間の三ケ戰隊を失ふに及び決勝的用法は完全に斷念せざるを得ざるに至れり茲に於て軍は專ら持久用法に依り小規模の出擊を持續し敵海上艦艇の行動を制し陸上作戰を容易ならしむることとせり

第二款　海上挺進戰隊攻撃の狀況

軍は新方針に基き一部海上挺進第二十七戰隊（一中隊欠）を以て中城灣方面の爾餘の在本島兵力を以て西海面特に嘉手納沖方面の敵艦艇を夫々好機を捉へて攻撃をせしめたり攻撃は四月上旬より開始せられ五

月四日攻勢に於ける逆上陸策源を以て最高潮に達し五月下旬首里戦線後退の頃迄繼續せり

作戦開始直前保有せし出動可能舟艇數約二百八十隻（第二十九戦隊は一中隊のみ到着しありてその主力は乘船沈没の爲亀美大島に滯留す）にして出撃命中せりと推定せらるゝもの百二十四隻判定せる撃沈敵艦艇數輕巡以下十數隻なり

各戦隊別推定出撃命中數左の如し

第二十六戦隊　一六

第二十七戦隊　六八（内二八は西海面に出動）

第二十八戦隊　二四

第二十九戦隊　一六

攻撃精神旺盛なる各戦隊は攻撃用舟艇を使用盡したる後に於ても所在引舟を利用之に爆雷を搭載して攻撃を續行せり判定撃沈數は其の攻撃が暗夜必死的に實行せられ確認の方法頗る困難なりし爲必しも正確を

保し難し

第三款　其の他の方法に依る艦船攻撃

一　海軍根據地隊は左の如く敵艦艇を攻撃せり

イ　運天港を根據地とする小型潜水艦及魚雷攻撃に任ずる快速艇隊は敵の上陸前既に根據地に於て砲撃に依り大損害を受け活動不能となれるもの多きも豆潜水艦は夜間方面まで進出して敵を攻撃せり

ロ　海軍砲台は當初軍の作戦方針に基き沈默主義を採れるも作戦に際しては好目標を捉へて之を攻撃し相當の成果を收めたり

ハ　本島周辺に敷設せし機械水雷は敵に相當の損害を與へたり

二　海岸に配置せし魚雷發射機は攻撃實施するに至らざりき

二　陸軍部隊の一部も未明海に出で海岸に直接する敵小舟艇を攻撃せしことありしも成果見るべきものなし

第五節　沖縄周邊に於ける我が航空部隊の活動

第一款　軍より觀たる航空作戰の要領

天號作戰計畫に基く「振り付け總特攻」主義は作戰準備の頃に記述せる如く南西諸島に關する限り展開遲く「振り付け」には至らざりしが他面「總特攻」主義は忠實に實行せられたり

航空作戰上敵上陸軍を海上に於て一擧に撃滅せんとする航空部隊の企圖は遂に達成せられず其の本格的活動は敵上陸後開始せられ爾後連日T數機乃至數T機を以て本島周邊に蝟集する敵艦船に對し必死突撃を繰續せり作戰の終始を通じ無事沖縄近海に到達突撃せし機數一千五百機を下らず

第二款　航空作戰の地上作戰に及ぼしたる影響

純作戰的見地よりすれば我が航空部隊の作戰は地上作戰に大なる影響なく敵をして意の如く沖縄攻略戰を遂行せしめたる如く觀察せらるる又其の成果は一應左の如く統計上なりあるも戰果確認方法頗る不確實にして實際の戰果は之より尠きものと認めらる

大破炎上	A—11		
	aA—13～14		
	B— 5		
	C—29		
	D—100		
	T— 82		
	不—114		
	他—35		
計	389 ～ 390		
中小破	A—6～7		
	aA—5		
	B—14		
	C—34		
	D—19		
	T—34		
	不—116		
	他—2		
計	230 ～ 231		
總計	619 ～ 621		

純作戰上の一般觀察以上の如しと雖必死特攻に任じたる幾多忠勇無比なる戰友の尊き犧牲的行爲に依り地上作戰軍の物心兩面上得たる支援は斷じて過少評價すべからず其の主要なるものを擧ぐれば左記の如し

イ、全軍環視の裡幾万千の火光に染まる防空彈幕に悠々突入する特攻

機の壯烈鬼神を哭かしむる光景は將兵の志氣を鼓舞し我等は孤ならずとの自信力を維持するに絶大の效果ありたり

2. 特攻機の攻擊時機は主として翌明、薄暮に選定せられたり從つて敵艦隊は日沒直前頃より翌日出直後頃迄の間は其の主力(二部)は夜間と雖沿岸に殘留し不斷の砲擊を繼續せり(一)は距岸三、四十粁の沖合に避退(通常粟國島附近慶良間灣内及其の西方海面)し防空陣を形成するを常とせり之が爲薄暮より翌明に至る間は我が地上部隊の兵力機動、部署の變更及整理、築城の增强補備、軍需品の補給輸送等を可能容易ならしめ大いに地上作戰に貢獻せり

第四章　組織的戰鬪終了後の狀況

第一款　終戰迄の狀況

一、軍主力方面

六月二十三日黎明軍司令官の自決と相前後し第六十二師團〃獨立混成第四十四旅團、軍砲兵隊の各司令部は摩文仁附近に於て又第二十四師團司令部は六月二十八日直樂平に於て玉碎す

其の他第一線諸部隊も亦軍の最後の命令に基き各陣地に於て孤立戰鬪を續け六月末迄には部隊として殘ぬ玉碎せり

軍後指揮官を失へる將兵中敵線を突破し國頭郡方面に脱出して遊擊戰を繼續せんとする者數千を下らず其殆ど全部目的を達せずして戰死し爾他の殘存將兵は各洞窟陣地に於て遊擊戰を續行して終戰に至る其の數も亦數千なり此の種の殘兵中最も顯著なるは第三十二軍砲兵隊(配屬部隊の一部を含む)の輸送長大尉以下數百名にして第二十四師團の主陣地帶上國吉附近の洞窟陣地に於て最後迄遊擊戰

戦闘継続して終戦に至りたり

二、第主力以外の方面

慶良間群島方面の部隊は死傷比較的尠く其の大部は敵の攻撃を受けざる地域に健在し或は分散して地下、密林或は島民の間に潜伏し遊撃戦を続行して終戦に及べり

第二款　終戦後の状況

生存将兵は終戦後逐次武装解除せられ昭和二十年九月上旬頃迄には其の大部は陣地を出でて在石川収容所に入り爾後少数宛殆ど連日降伏者続出し年末に及べり生存者の概数左の如し

1、本土よりの派遣者

将校	約五百	約九千
下士官	約一千五百	
兵	約七千	

2、沖縄出身者　将校以下　約八千

3、海軍関係　一千内外と判断せらるる

右は沖縄のみならず布哇其の他各地の収容所に入所したるものゝ推定数なり

其の三　彼我損害の概況

1、日本軍

戦死	約七五、〇〇〇
負傷	生存者の約半数（約一二、〇〇〇）と推定

右の外沖縄島民（非戦闘員）の死者約五〇、〇〇〇と推定せらる

2、米軍（米側の発表）

地上損害	戦死	約一〇、〇〇〇
	負傷	約二七、〇〇〇
計約		三七、〇〇〇